

伊勢市教育委員会の学力向上に向けた取組

～平成31年度全国学力・学習状況調査の結果を踏まえて～

1 確かな学力と社会参画力の育成について

これからの日本社会は、将来の予測が困難な複雑で変化の激しいものとなるといわれています。そのような社会で生きる子どもたちには、「知識及び技能」、「思考力・判断力・表現力など」、「学びに向かう力、人間性など」の3つの柱からなる「資質・能力」を総合的にバランスよく育んでいく必要があります。また、今後、子どもたちが社会で自立し、他者と協働しながら新たな価値を創造していく力を身に付けるためには、課題の発見と解決に向けて主体的・対話的で深い学びを実現させなければなりません。

そこで、教員が子どもたちの学習における状況を丁寧に把握したり、自ら指導方法を不断に見直し、改善したりしていくことが必要です。そのため以下の事業を通して、幼稚園、小・中学校等が連携し取組を進めることができるよう支援しています。

1 学力の育成

(1) 学力向上推進事業

- ・児童生徒の学習到達度を明らかにし、個に応じたきめ細かな指導に生かすために目標基準準拠検査（CRT）を市内全小中学校で実施しています。
- ・研究校を指定し、教育課程に係る実践研究を進めています。

(2) スクールイノベーション総合推進事業

- ・「主体的・対話的で深い学び」を具現化した授業づくりや ICT 機器の効果的な活用についての研究を通して、教職員の授業力向上や校内研修体制の確立を目指しています。
- ・研究委託校は、教育研究所と連携して授業改善研究を進めています。

(3) ICT 活用実証研究事業

- ・児童の主体的に学習に取り組む意欲の向上や家庭学習の時間の確保、基礎的な知識・技能の定着を目指し、全小学校5年生1学年分を対象に持ち帰り可能なタブレット PC を配置します。持ち帰り学習（ドリル学習）だけでなく、朝学習や振り返り学習など授業での活用も行い、その成果を検証します。

2 グローバル教育の推進

(1) エンジョイイングリッシュ事業

- ・小学校では、新学習指導要領で求められている、外国語によるコミュニケーション能力の素地や基礎を養うために、ALT との交流を行っています。
- ・研究校を指定して、外国語活動早期化、教科化に向けて、研究実践を行っています。
- ・中学校では、スピーチコンテストを開催し、授業の成果を発表する場を設けています。
- ・小中学生を対象に、英語検定にチャレンジすることを通して、英語への関心意欲を高めるため、英語検定料の補助を行っています。

(2) ALT 活動事業

- ・ALT は小学校1、2年生では、歌やゲームを中心とした外国語の活動や国際理解教育を行い、3～6年生では、担当教諭が行う外国語活動の授業を補助しています。また、異文化理解のため、ALT が行事等で児童と交流できるようにしています。
- ・中学校では、ALT は授業に加わることで、生徒が生きた英語に触れる機会を増やし、授業が実際のコミュニケーション場面の1つとなるようにしています。

(3) 研修講座の実施（外国語活動）

- ・小学校での外国語活動（中学年）、外国語科（高学年）が令和2年度に全面実施となることを

踏まえ、グローバル化に対応する授業のあり方や中学校への接続について学ぶ研修講座を実施しています。

3 社会参画力の育成

(1) 未来へチャレンジ！職場体験推進事業

- ・キャリア教育の一環として、職場体験活動を行っています。将来さまざまな生き方や進路選択の可能性があると等の学習を通して、生徒の勤労観・職業観を育てています。
- ・地元企業のボランティア（ビジネスパーク伊勢）の協力による出前授業の実施により「地域の子どもは地域で育てる」という気運を高めています。

(2) 子どもたちとつくる「やさしいまち伊勢市」支援事業

- ・「やさしいまち伊勢市発見大賞」を実施し、各校での学習活動を通して全ての人が住みやすいまちづくりについて考え、気づき、行動した取組の成果を発表する機会となるよう、「ユニバーサルデザインの部」、「発見・体験作文の部」、「俳句・短歌・川柳の部」の3部門で作品を募集しています。
- ・事業推進校を指定し、自然や環境、伝統文化、福祉、ボランティア等に関する体験学習により、児童生徒が「やさしいまち伊勢市」のまちづくりについて考え、気づき、行動する取組を推進しています。
- ・幼稚園では、地域の人とのふれあいを通じた体験により、地域のよさや愛着を感じることができ活動を進めています。
- ・中学生対象に、赤ちゃんとのふれあい体験や助産師・保健師等の講演により、小さな子どもや家庭について知る、他者への関心を持つ、共感能力を高める機会を設定しています。
- ・小中学校の代表者児童・生徒による「子ども未来会議」を開催し、将来自分たちが住む町をより良いものにしていこうとする意欲を育てています。
- ・授業のユニバーサルデザイン化により、全ての児童生徒にとっての「分かる、できる」を保障する授業づくりを行うことを目指しています。

4 情報教育の推進と ICT の活用

(1) 情報モラル教育の推進

- ・情報教育係や ICT アドバイザーを派遣し、児童生徒や保護者、地域の人々を対象に情報モラル学習の充実に努めています。

(2) ICT スキルアップ講座の実施

- ・教員を対象に、ICT を活用した学習活動の充実、児童生徒のプログラミング的思考の育成を目的とした授業づくりについての講座を実施しています。

5 幼児教育の推進

(1) 保幼小中の連携

- ・途切れのない支援を充実させるため、保幼小中が連携できるように、教育・保育の参観の機会拡大や情報交換会及び研修会の実施などに取り組んでいます。

(2) 教育研究プロジェクト（幼稚園教育）

- ・「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を明確化し、発達段階を踏まえた幼稚園教育のあり方について委託研究を進めています。公開保育研究会の案内を小中学校教員にも発信し相互理解と連携を図っています。

(3) 研修講座の実施（乳幼児教育専門講座）

- ・乳幼児教育に係る今日的な課題を研修講座のテーマとして設定し、県内外の専門家を講師に迎え、幼稚園教員、保育士、小学校教員等とともに実践的に学んでいます。

2 平成 31 年度全国学力・学習状況調査の伊勢市の結果

1 平成 31 年度全国学力・学習状況調査について

(1) 調査の目的

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てます。さらに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立します。

(2) 調査日

平成 31 年 4 月 18 日（木）実施

(3) 対象者

市内全小学校の第 6 学年（1111 名）、全中学校の第 3 学年（992 名）で実施

(4) 調査科目

小学校：国語、算数

中学校：国語、数学、英語

(5) 調査内容

① 教科に関する調査

- ・ 出題範囲は原則、調査する学年の前学年までに含まれる指導事項
- ・ 出題内容は、下記①と②を一体的に問う
 - ①身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能等
 - ②知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力等に関わる内容

② 生活習慣や学習環境等に関する調査

- ・ 児童生徒に対する学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査
(児童・生徒質問紙)
- ・ 学校に対する指導方法に関する取組や人的・物的な教育条件の整備の状況等に関する調査
(学校質問紙)

(6) 調査結果についての考え方

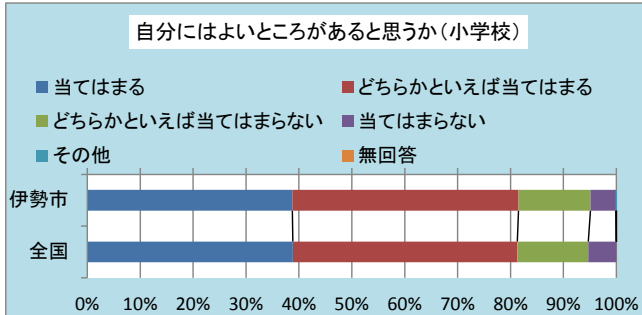
- ・ 伊勢市の教育施策・各学校の教育の改善、各児童生徒の全般的な学習状況の改善等につなげることが重要であると考えています。
- ・ 調査により測定できるのは学力の特定の一部であること、学校における教育活動の一側面であることを踏まえ、調査結果を活用しています。

2 学校質問紙・児童生徒質問紙の調査結果

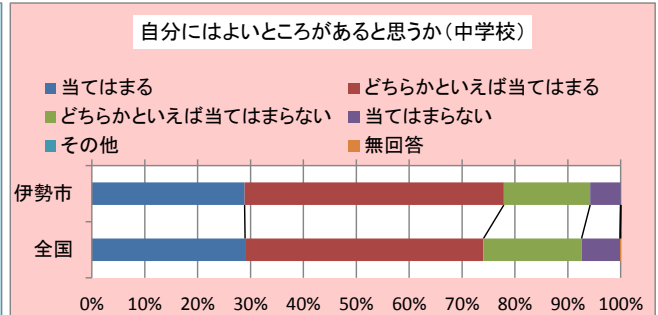
学校質問紙・児童生徒質問紙から伊勢市の学校の様子・子どもの様子をみていきます。

※以下、小学校対象の学校質問紙は（小学校）、中学校対象の学校質問紙は（中学校）、小学生の児童質問紙は（児童）、中学生の生徒質問紙は（生徒）と記載。小学校のグラフの背景は水色、中学校はピンク色にしました。

(1) 自己有用感・達成感

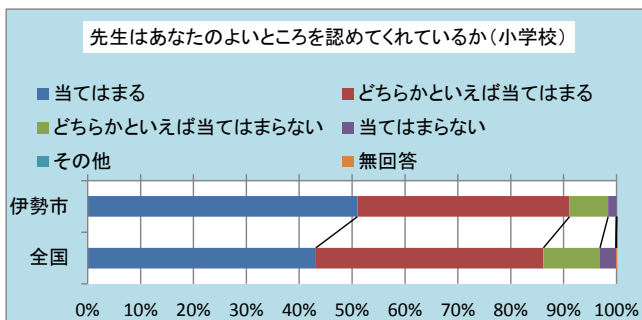


グラフ1（児童）

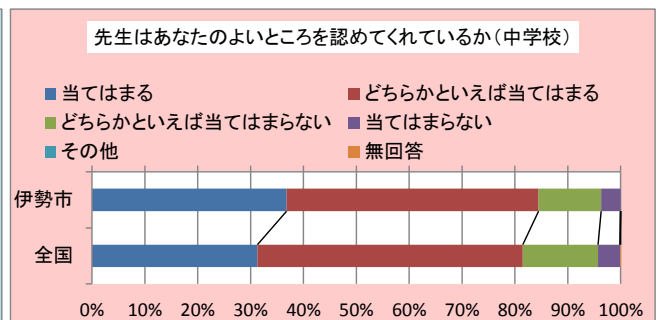


グラフ2（生徒）

グラフ1・2は「自分にはよいところがあると思うか」を聞いたものです。伊勢市では、「当てはまる」、「どちらかといえば当てはまる」と回答した子どもは昨年度に引き続き小・中学校とも全国の割合を上回っています。



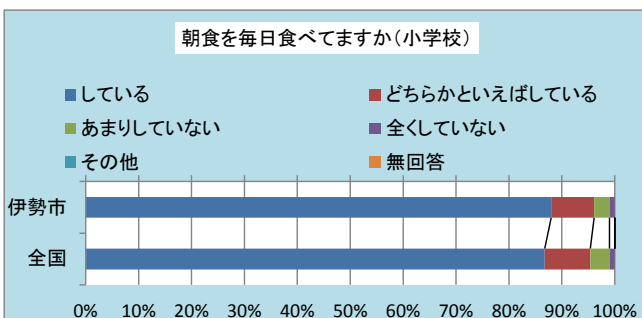
グラフ3（児童）



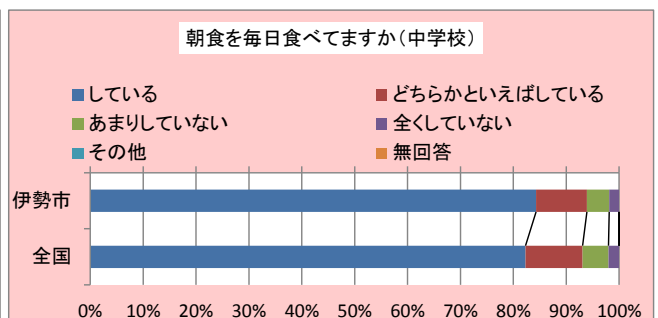
グラフ4（生徒）

グラフ3・4は「先生はあなたのよいところを認めてくれているか」を聞いたものです。伊勢市では、「当てはまる」、「どちらかといえば当てはまる」と回答をした子どもは昨年度に引き続き、小・中学校とも全国の割合を上回っています。子どもたちへの先生たちのきめ細かな関わりにより、自己有用感や達成感が育てられていることが考えられます。

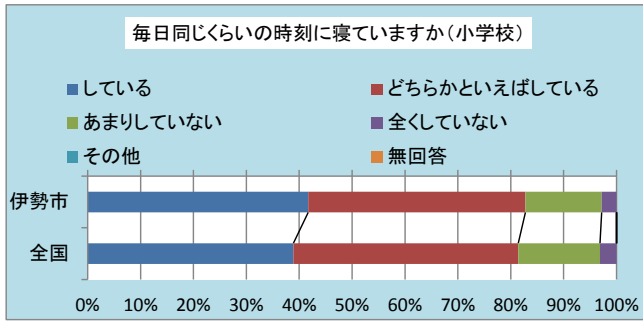
(2) 児童生徒の基本的生活習慣について



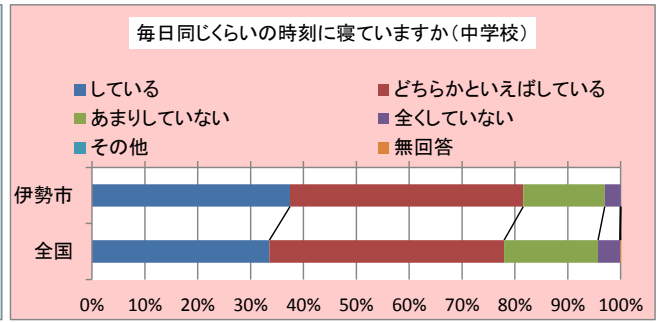
グラフ5（児童）



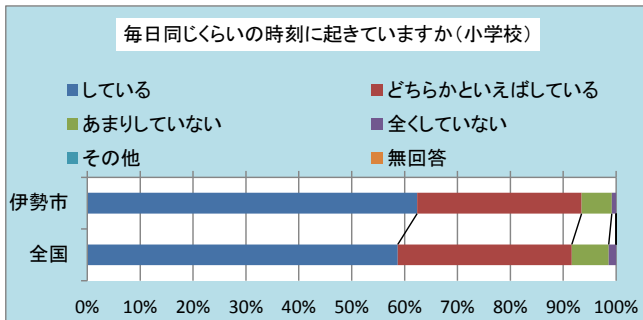
グラフ6（生徒）



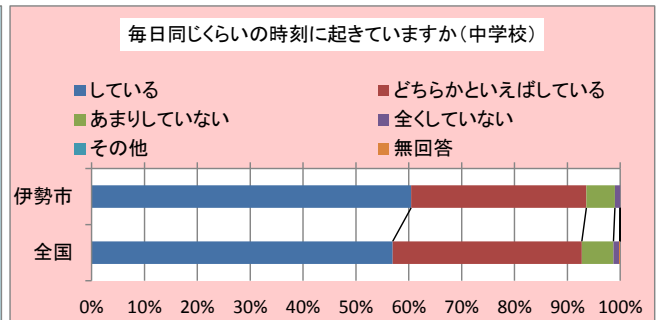
グラフ7 (児童)



グラフ8 (生徒)



グラフ9 (児童)

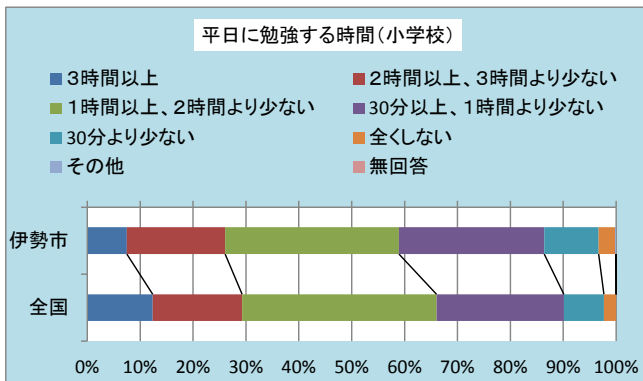


グラフ10 (生徒)

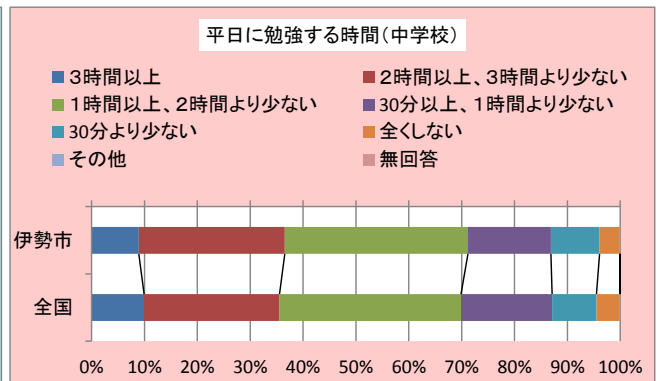
グラフ5・6は「朝食を毎日食べているか」、グラフ7・8は「毎日同じくらいの時刻に寝ているか」、グラフ9・10は「毎日同じくらいの時刻に起きていますか」を聞いたものです。伊勢市では「している」、「どちらかといえば、している」と回答した子どもの割合は、昨年度に引き続き全国の割合を上回っています。

家庭での協力により、基本的な生活習慣については、おおむね定着していると考えられます。

(3) 児童生徒の家庭での学習習慣について



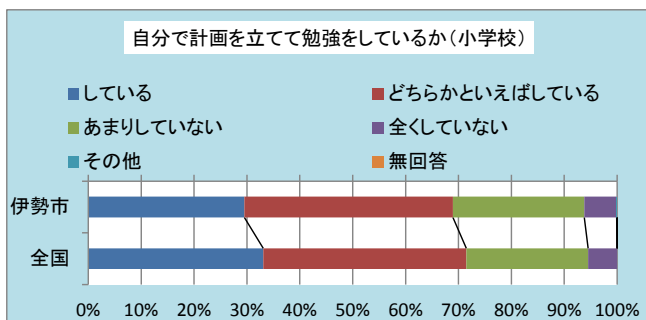
グラフ11 (児童)



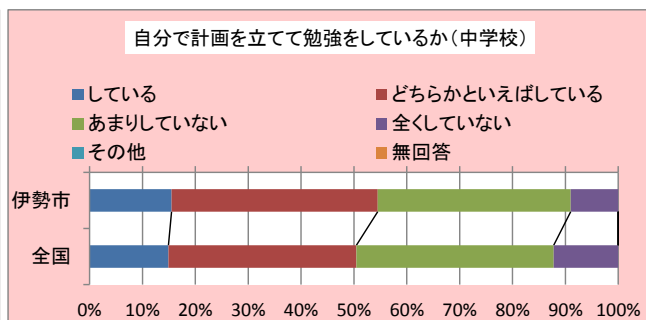
グラフ12 (生徒)

グラフ11・12は「平日に勉強する時間」を聞いたものです。伊勢市では、昨年度「1時間以上」と回答した子どもの割合は、小中学校ともに全国の割合を下回っていました。

今年度の小学校は依然として大きく下回っていますが、中学校では、全国を上回り、改善されております。

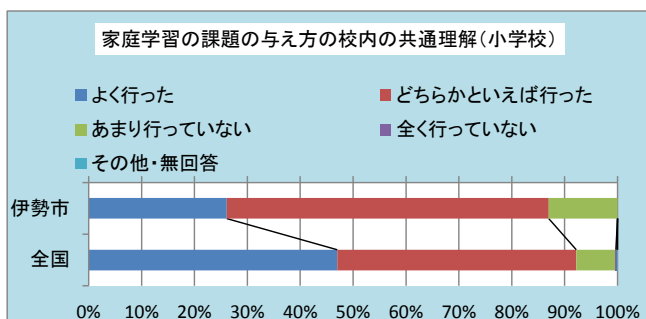


グラフ 13 (児童)

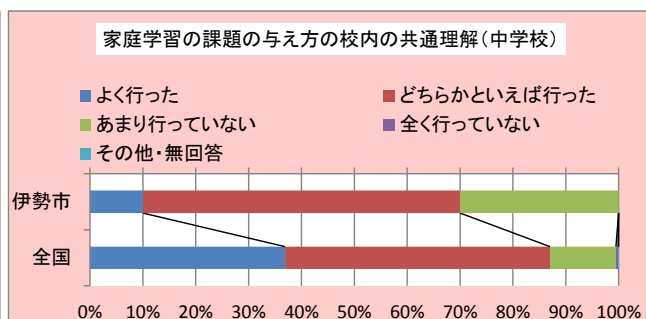


グラフ 14 (生徒)

グラフ 13・14 は「自分で計画を立てて勉強をしているか」を聞いたものです。小学校では、「している」、「どちらかといえばしている」と回答した割合が全国を下回っており課題が見られます。一方、中学校では昨年度に引き続き全国を上回っており、家庭での学習を計画的に実行していることがわかります。

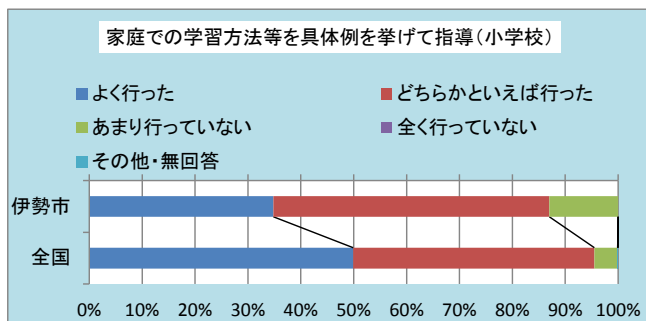


グラフ 15 (小学校)

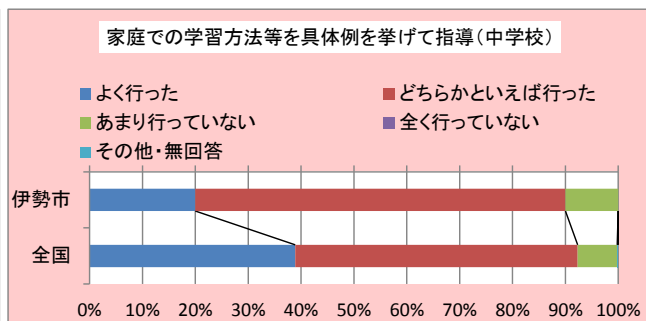


グラフ 16 (中学校)

グラフ 15・16 は学校に対して、「家庭学習の課題の与え方について、校内の教職員で共通理解を図ったか」を聞いたものです。「よく行った」「どちらかといえば行った」と回答した割合が、昨年度に引き続き全国の割合を大きく下回っています。



グラフ 17 (小学校)

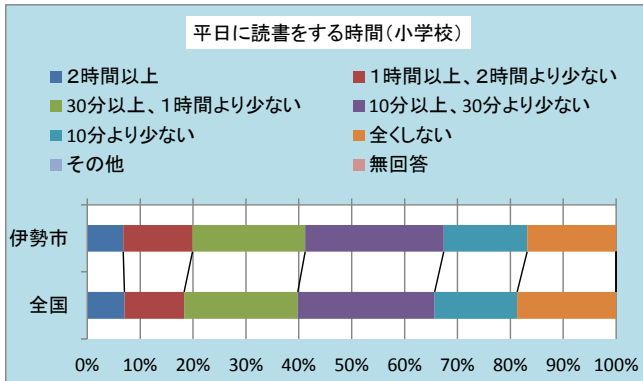


グラフ 18 (中学校)

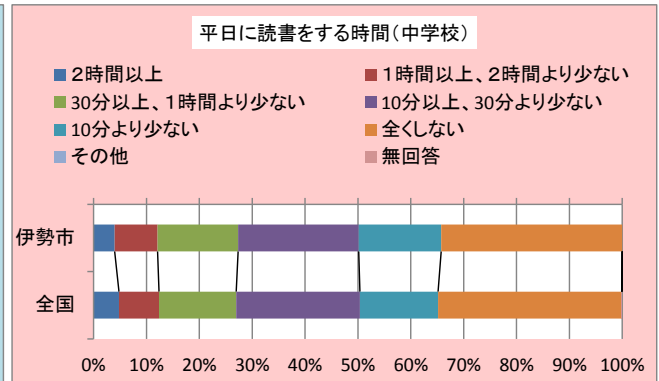
また、グラフ 17・18 は学校に対して、「家庭学習の取組として、児童生徒に家庭での学習方法を具体例を挙げながら教えたか」を聞いたものです。小・中学校とも、「よく行った」、「どちらかといえば行った」と回答した割合が、昨年度に引き続き全国の割合を下回っています。

学校が組織的に家庭学習の課題の提示について、質や量の共通理解を図ったり、家庭での学習方法について子どもたちの発達段階に応じて指導したりして、家庭学習を促す取組を充実させ、家庭と協力して家庭での学習習慣の確立を図っていく必要があります。

(4) 児童生徒の家庭での読書習慣について



グラフ 19 (児童)

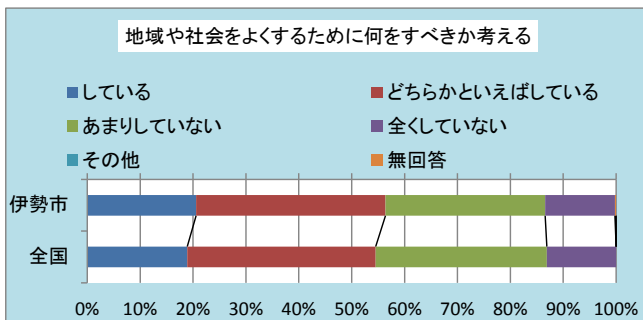


グラフ 20 (生徒)

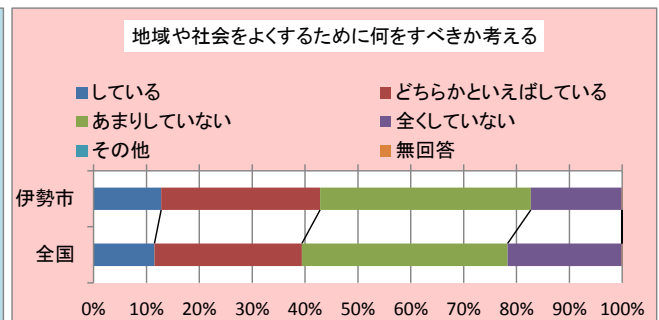
グラフ 19・20 は「平日に読書をする時間」を聞いたものです。小学校では「10分以上」と回答した割合は、昨年度に引き続き全国の割合を上回っています。また、中学校では「10分以上」と回答した割合は、若干全国の割合を下回っていますが、昨年度と比較すると改善傾向にあります。

家庭との連携のもと、家庭読書（家読(うちどく)）を促進し、子どもたちの生涯にわたる読書習慣を確立していくことが大切です。

(5) 地域や社会にかかわる活動の状況について



グラフ 21 (児童)



グラフ 22 (生徒)

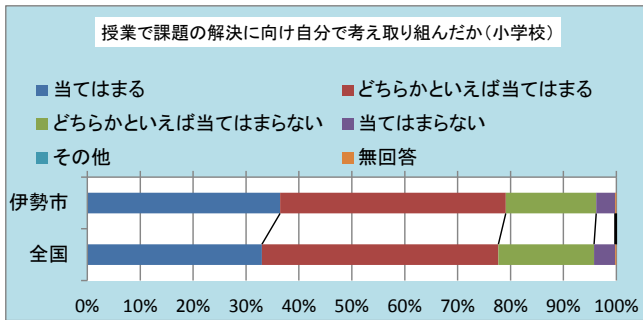
グラフ 21・22 は「地域や社会をよくするために何をすべきか考えているか」を聞いたものです。小中学校とも、「当てはまる」、「どちらかといえば当てはまる」と回答した割合は、全国の割合を上回っています。学校・家庭・地域の連携によって、子どもたち学習環境が整えられ、子どもたちと地域がうまく結びついていることがわかります。

(6) 主体的・対話的で深い学びの視点による学習指導の改善について

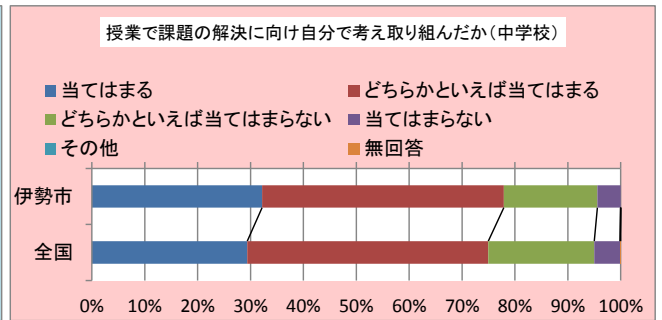
平成 29 年 3 月 31 日に新学習指導要領が告示され、昨年度からの移行期間を経て小学校では、平成 32 年度 4 月から、中学校では、平成 33 年 4 月から全面実施されます。

新学習指導要領では、学ぶことに興味や関心をもち、毎時間見通しを持って粘り強く取り組むなどの「主体的な学び」、個人で考えたことを意見交換したり、議論したりすることで新たな考え方に気付いたりするなどの「対話的な学び」、課題の追究、課題の解決を行う探究の過程に取り組むなどの「深い学び」の実現に向けた授業改善が求められています。

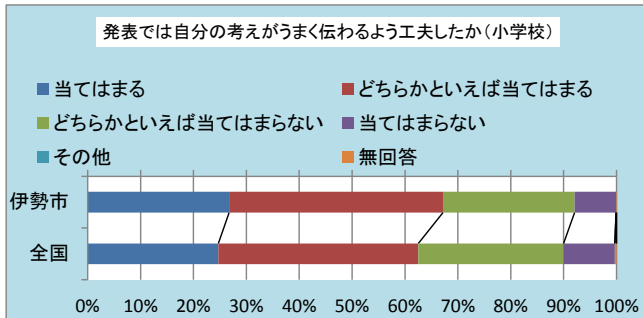
児童生徒質問紙では、以下の質問によって、「主体的・対話的で深い学び」を目指した授業の実践の状況を検証しています。



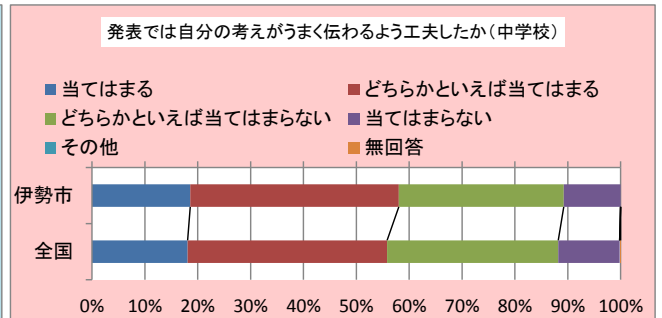
グラフ 23 (児童)



グラフ 24 (生徒)

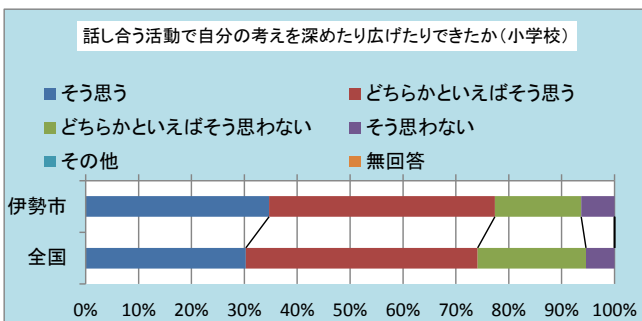


グラフ 25 (児童)

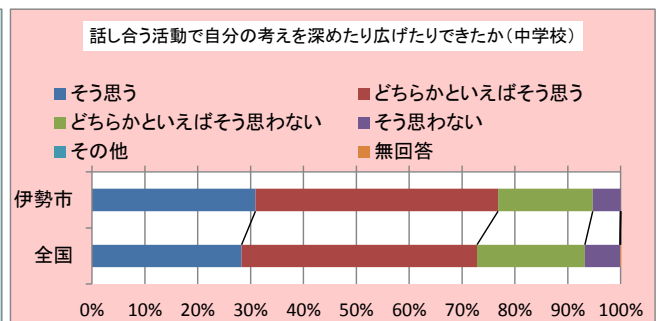


グラフ 26 (生徒)

グラフ 23・24 は「授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいたと思うか」、グラフ 25・26 は「授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立て等を工夫して発表していたと思うか」を聞いたものです。「当てはまる」、「どちらかといえば当てはまる」と回答した割合は、昨年度に引き続き小中学校とも全国の割合を上回っています。



グラフ 27 (児童)

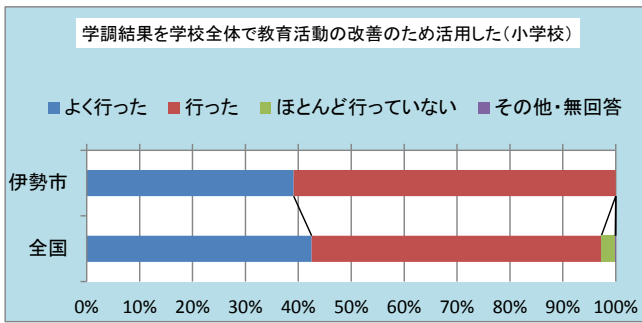


グラフ 28 (生徒)

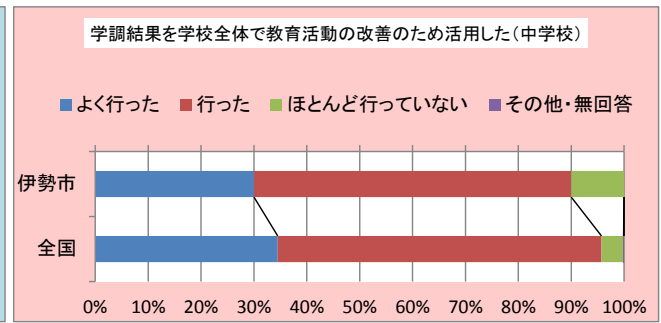
グラフ 27・28 は「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができるか」を聞いたものです。「そう思う」、「どちらかといえばそう思う」と回答した割合は小中学校とも全国の割合を、昨年度に引き続き上回っています。

各学校では、主体的・対話的で深い学びを実現するような授業に向けて、取組が進んでいます。

(7) 全国学力・学習状況調査結果の活用について

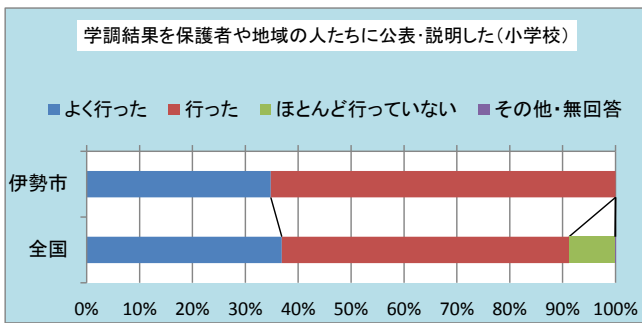


グラフ 29 (小学校)

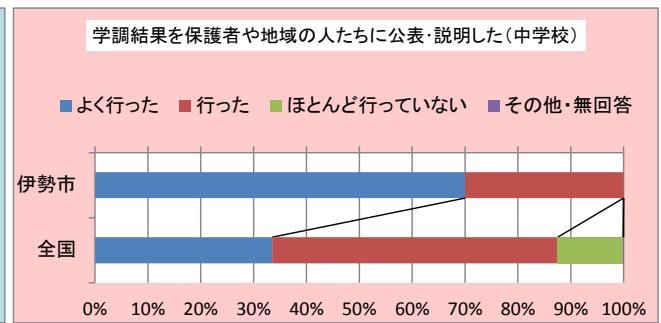


グラフ 30 (中学校)

グラフ 29・30 は「全国学力・学習状況調査結果を学校全体で教育活動の改善に活用したか」を学校に対して聞いたものです。小学校は、昨年度に引き続き、全ての学校で結果を学校全体で教育活動の改善に活用しています。中学校では「よく行った」、「行った」と回答した割合は、昨年度に引き続き、全国を下回っており課題が見られます。



グラフ 31 (小学校)



グラフ 32 (中学校)

グラフ 31・32 は「全国学力・学習状況調査の結果について保護者や地域の人たちに公表や説明を行ったか」を学校に対して聞いたものです。小中学校ともすべての学校において、保護者や地域の人たちに対して公表や説明を行っています。

今後も、学校の教育活動や学校運営の状況に関する情報を積極的に保護者や地域に提供することで、家庭、地域との連携を深め、学校内外を通じた児童生徒の充実の活性化を図っていくことが大切です。

3 教科に関する調査の結果

(1) 各教科の正答の状況

教科に関する調査の平均正答率・正答数は次のとおりです。

H31年度の教科に関する調査の概要

	小学校調査		中学校調査		
	国語	算数	国語	数学	英語
H31全国 平均正答数	8.9/14	9.3/14	7.3/10	9.6/16	11.8/21
H31三重県 平均正答数	9.0/14	9.3/14	7.2/10	9.6/16	11.8/21
H31全国 平均正答率	63.8	66.6	72.8	59.8	56.0
H31三重県 平均正答率	64.2	66.7	71.7	60.3	56.0
H31伊勢市 平均正答率概 要	全国と ほぼ同じ	全国と ほぼ同じ	全国と ほぼ同じ	全国と ほぼ同じ	全国と ほぼ同じ

※国語、算数・数学、英語の平均正答率は、それぞれの平均正答数を設問数で割った値の百分率（概数）です。

※平均正答率概要については、全国と伊勢市の差異が±3%以内をほぼ同じと表しています。

(2) 各教科の結果概要

※「平均正答数」は児童生徒の正答数の平均です。

※「平均正答率」は平均正答数を百分率で表示しています。

※概要の「各領域の平均正答率の状況」は、文部科学省から提供されたグラフであり、学習指導要領に示されたその教科における各領域の、伊勢市と全国（公立）の平均正答率を表したものです。

※「特徴的な結果であった設問とその出題の趣旨」に記載の記号の見方

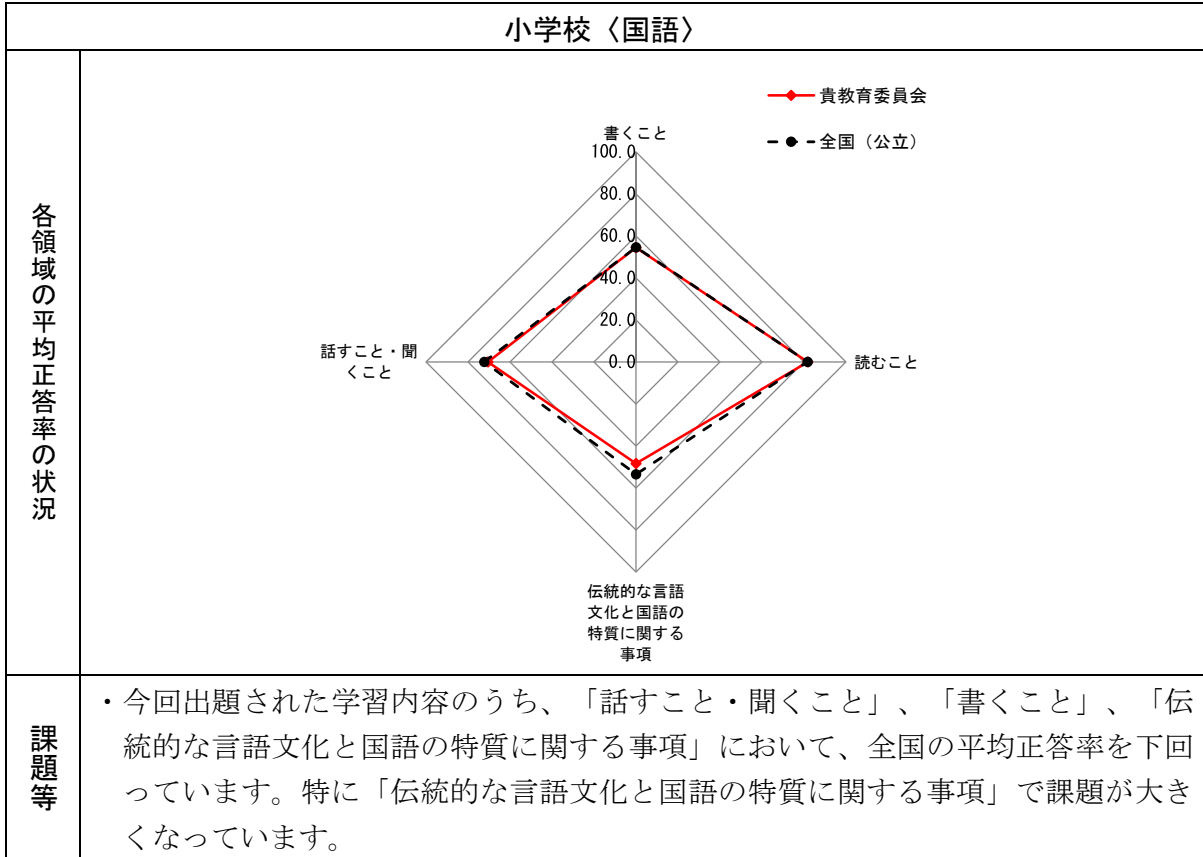
○：正答率が、全国平均よりも3ポイント程度以上高い設問のうち主な設問

▽：正答率が、全国平均よりも3ポイント程度以上低い設問のうち主な設問

※設問ごとの正答率は、それぞれの正答児童生徒数を全体の児童生徒数で割った値の百分率です。

小学校〈国語〉

①概要



②特徴的な結果であった設問とその出題の趣旨

ア：話すこと・聞くこと

▽3二 目的に応じて、質問を工夫する

エ：伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項

1 四(1) 学年別漢字配当表に示されている漢字を文の中で正しく使う

○ア 調査のたいしょう

▽イ 友達にかぎらず

▽ウ かんしんをもってもらいたい

▽1 四(2) 文と文との意味のつながりを考えながら、接続語を使って内容を分けて書く

小学校〈算数〉

①概要

小学校〈算数〉	
各領域の平均正答率の状況	<p> ◆ 貴教育委員会 -●- 全国（公立） </p>
課題等	<ul style="list-style-type: none"> ・今回出題された学習内容のうち、すべての領域において、全国の平均正答率を下回っています。特に「量と測定」で課題が大きくなっています。

②特徴的な結果であった設問とその出題の趣旨

ア：数と計算

- ▽ 3 (2) 示された計算の仕方を解釈し、減法の場合を基に、除法に関して成り立つ性質を記述できる
- ▽ 3 (4) 示された除法の式の意味を理解している

イ：量と測定

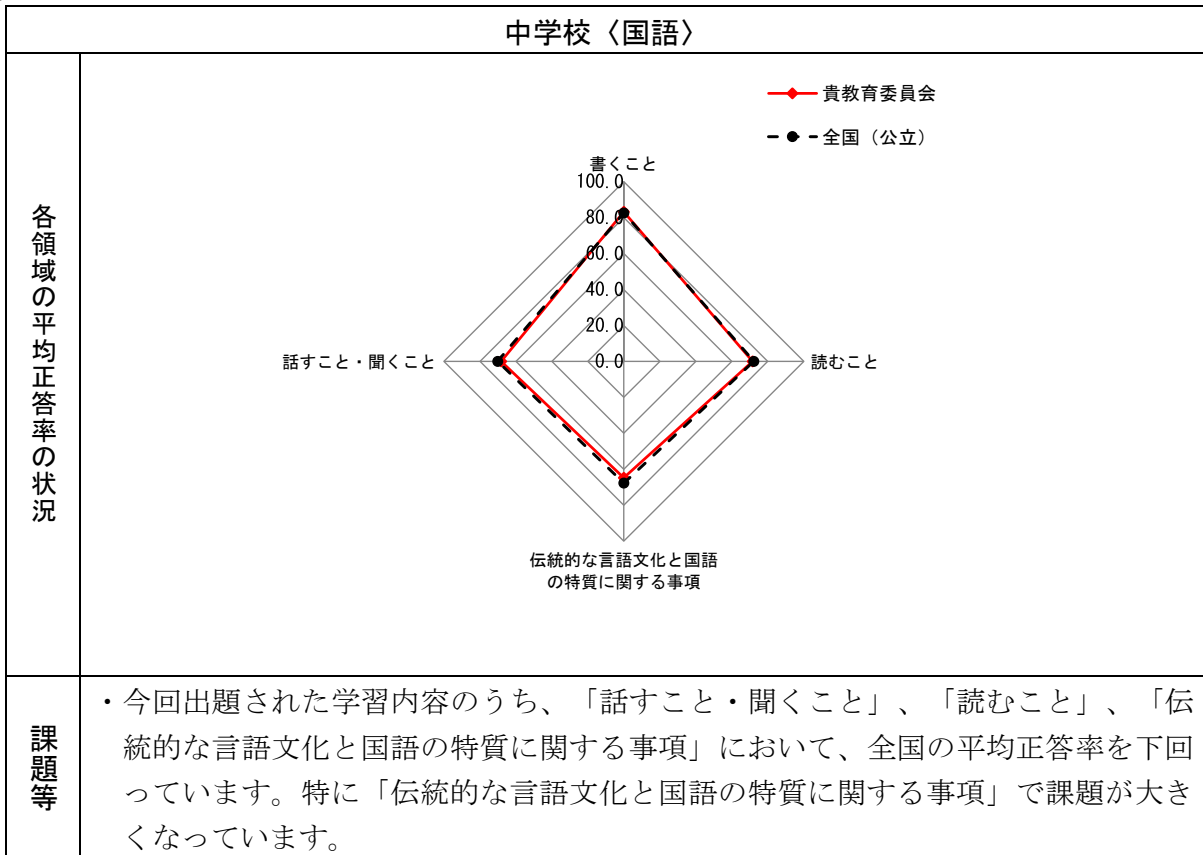
- ▽ 1 (3) 示された図形の面積の求め方を解釈し、その求め方の説明を記述できる

エ：数量関係

- 2 (2) 2010年の市全体の水の使用量が1980年の市全体の水の使用量の何倍か読み取ることができる

中学校〈国語〉

①概要



②特徴的な結果であった設問とその出題の趣旨

ア：話すこと・聞くこと

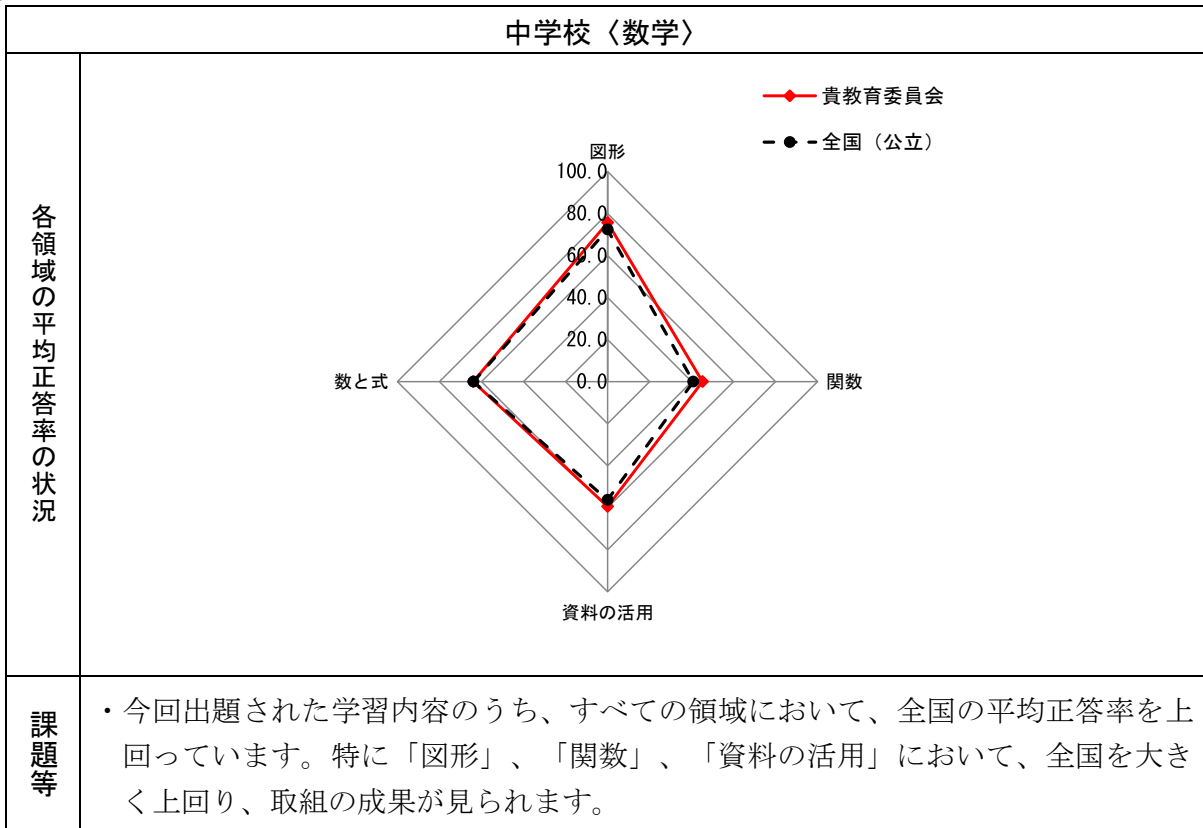
▽2一 話合いの話題や方向を捉える

エ：伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項

▽1四 封筒の書き方を理解して書く

中学校〈数学〉

①概要



②特徴的な結果であった設問とその出題の趣旨

イ：図形

- 7 (1) 証明の根拠として用いられている三角形の合同条件を理解している
- 7 (3) 結論が成り立つための前提を考え、新たな事柄を見だし、説明することができる

ウ：関数

- 4 反比例の表から、 x と y の関係を式で表すことができる
- 6 (2) 事象を数学的に解釈し、問題解決の方法を数学的に説明することができる

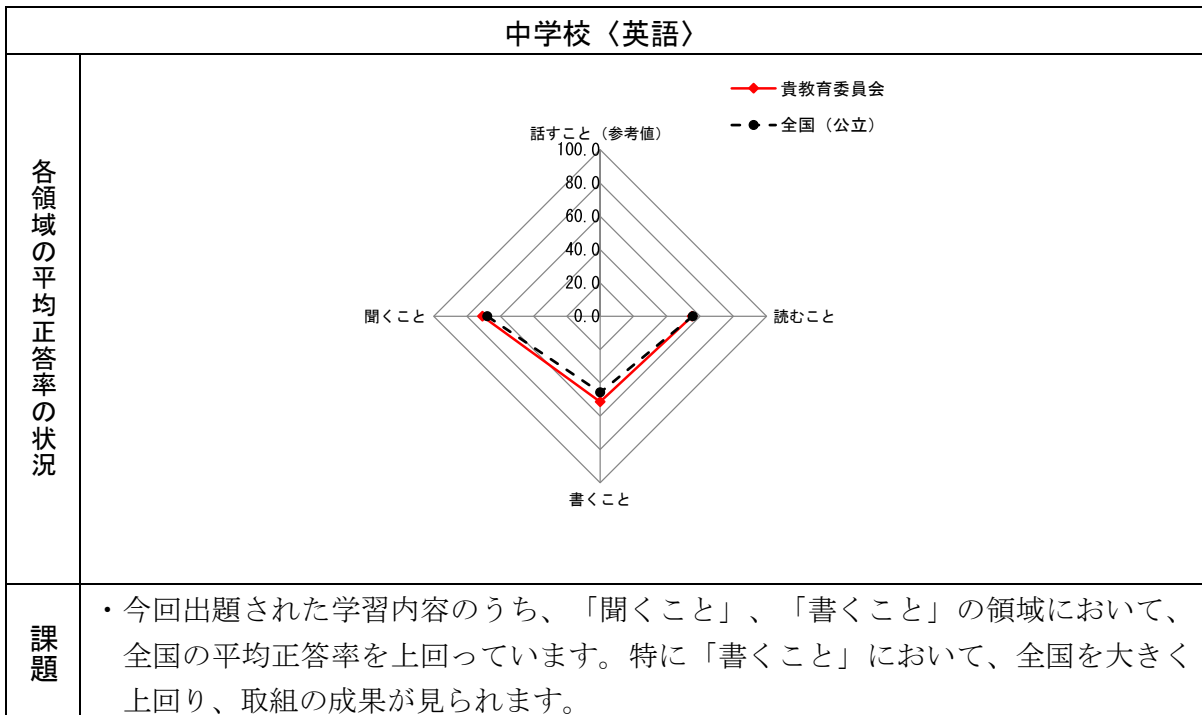
エ：資料の活用

- 5 簡単な場合について、確率を求めることができる
- 8 (1) 資料を整理した表から最頻値を読み取ることができる
- 8 (2) 資料の傾向を的確に捉え、判断の理由を数学的な表現を用いて説明することができる

中学校〈英語〉

①概要

* 「話すこと」調査の結果は、国より全国の平均正答数及び平均正答率のみが「参考値」として公表されており、県や市町には結果提供されていないため、今回の分析には含んでいません。



②特徴的な結果であった設問とその出題の趣旨

ア：聞くこと

- 1 (1) 語と語の連結による音変化をとらえて、情報を正確に聞き取ることができる
- 1 (3) 日常的な話題について、情報を正確に聞き取ることができる
- 2 まとまりのある英語を聞いて、話の概要を理解することができる

ウ：読むこと

- 6 まとまりのある文章を読んで、話のあらすじを理解することができる
- ▽ 7 まとまりのある文章を読んで、説明文の大切な部分を理解することができる

エ：書くこと

- 9 (1)① 文の中で適切に接続詞を用いることができる
- 9 (1)② 文の中で適切に接続詞を用いることができる
- 9 (2)① 一般動詞の2人称単数現在時制の疑問文を正確に書くことができる
- 9 (2)② 一般動詞の1人称複数過去時制の肯定文を正確に書くことができる
- 9 (3)① 与えられた情報に基づいて、3人称単数現在時制の肯定文を正確に書くことができる
- 9 (3)③ 与えられた情報に基づいて、一般動詞の3人称単数現在時制の否定文を正確に書くことができる

4 課題がみられた設問の指導に当たってのポイント

(1) 小学校国語

① 文や文章の中で、漢字を正しく使う(対応設問1四(1))

漢字の学習指導に当たっては、日常的に文や文章の中で適切に使うことができるようにすることが大切である。そのためには、新出漢字を読み方や字形に注意して繰り返し練習することにとどまらず、本問のように自分が書いた文章を見直す中で、漢字のもつ意味を考えながら、文や文章の中での正しい使い方を習得できるようにすることが大切である。

② 接続語を使って、内容を分けて書く(対応設問1四(2))

読み手に分かりやすい文章で書くことの一つに、一文の長さを意識して、長くて伝わりにくいと感じた文は適当な長さの複数の文に分けて書くことが挙げられる。その際、接続語を適切に用いることで、前後の文の意味のつながりを明確にすることができる。

接続語は、文や文章の構成にかかわる語で、前後の文節や文などをつなぐ働きをもつ。文章を書く様々な機会を捉えて、文脈に沿って接続語の役割を理解するとともに、接続語を使って文を分けて書く指導を工夫することが大切である。

具体的には、本問のように自分が書いた文章を、文の長さという点に注目して読み返す学習が考えられる。一文の中で伝えようとしている内容が多く、長くて伝わりにくい場合には、接続語を使って複数の文に分けて書き直していく。その際、以下の点などに注意するように指導することが考えられる。

- ・ 文と文との意味のつながりに気を付けて分けているか。
- ・ 接続語の役割を正しく捉え、適切に選んで使っているか。
- ・ 文末表現を整えているか。

書き直す前と後の文を比べ、接続語を使って複数の文に分けて書き直したことで、伝えたいことがより明確になったという実感をもつことができるようにすることも大切である。

③ 話の展開に沿って、目的に応じた質問をする(対応設問3二)

情報を集めるためにインタビューをするとは、目的をもって特定の相手に質問し、必要な情報を聞き出すことである。その際、話の目的は何か、相手が自分に対して伝えたいことは何かなどの話の内容や話し手の意図を踏まえて十分に聞き取るとともに、インタビューをする自分はどういった情報を求めているのか、聞いた内容をどのように活用しようとしているのかなどを明確にして聞くことが重要である。そのためには、あらかじめ用意した質問を予定した順序で聞くだけではなく、話の展開に沿って、目的に応じた質問をすることが必要である。

設問一では、相手の話に対して、自分の理解が正しいかどうかを確認する意図で質問をしている。本問のように「それはつまり、～ということでしょうか」など、話し手の言葉を自分の言葉で言い換えて確認する場合の他、「～とはどういうことでしょうか」、「～について、もう一度説明をお願いします」など、よく理解できなかった箇所について聞き直す場合もある。

他にも、質問には、設問二の選択肢にあるとおり、以下のようなものがある。

質問の意図		質問の仕方
話の内容を確認する	分からない言葉の意味を確認する (設問二の選択肢4)	・自分が分からなかった言葉を具体的に挙げて質問をする。 「〇〇とは、どういうことですか。」
	自分の理解が正しいかどうかを確認する	・自分の理解したことを伝え、正しいかどうかを質問する。 「それは〇〇ということでしょうか。」
相手から考えを引き出す	相手の思いをさらに引き出す (設問二の選択肢1)	・相手が繰り返した言葉を用いて質問をする。 「〇〇について、他にはどのようなことがありますか。」 「他にも〇〇なことはありますか。」
	相手に質問をする理由を理解してもらう (設問二の選択肢2)	・インタビューの目的を伝えてから質問をする。 「〇〇について知りたいのですが、～ですか。」 「〇〇の大切さを全校に広めたいのですが、～ですか。」
	相手が答えやすいようにする	・別の言葉に言い換えて質問をし直す。 「では、〇〇(言い換えた言葉)については、いかが(設問二の選択肢3)ですか。」 ・具体例を挙げながら質問をし直す。 「例えば、〇〇(具体例)のようなことはありますか。」

これらのような質問をすることができるようにするためには、「質問の仕方」を技能として学ぶだけではなく、「何のために、どのような情報を聞き出したいのか」といった目的を明確にしてインタビューに臨むことが重要である。児童の「知りたい」という思いを大切にすることで、主体的に自分の理解を相手に確認したり、相手の思いを引き出したりしようとするのが期待できる。

(2) 小学校算数

① 図形の構成についての見方を働かせ、示された図形の面積の求め方を解釈し、求め方について説明することができるようにする(対応設問1(3))

図形の合成や分解などの図形の構成についての見方を働かせ、図形の面積を、既習の求積公式を活用して求め、求め方について説明することができるようにすることが重要である。

指導に当たっては、例えば、本設問を用いて、二つの合同な台形で作られた図1の形について、面積の求め方を考察し式で表現して、面積の求め方について説明し合う活動が考えられる。その際、図1の形を「二つの合同な台形に分けることができる形」、「長方形から三角形を取り去ってできる形」といった面積の求積公式が既習である図形で構成されている形と捉えることができるようにすることが大切である。さらに、面積の求め方について、「 $5 \times 4 = 20$ 、 $4 \times 2 \div 2 = 4$ 、 $20 - 4 = 16$ だから 16cm^2 です。」などと説明した場合には、「20 や 4 は何を表していますか。」や「 $20 - 4$ の引くはどのようなことを表していますか。」などと学級全体に問いかけ、数の意味や演算の意味などを、図形と関連付けて説明することができるようにすることも大切である。

なお、例えば、第4学年や第5学年などにおける、L字の形をした図形や凸の形、凹の形をした図形の面積や体積の求め方を考える場面で、図形と式とを関連付け、面積や体積の求め方について説明し合う活動も考えられる。

②計算に関して成り立つ性質を見だし、表現することができるようにする(対応設問3(2))

適用する数の範囲を広げていながら統合的・発展的に考え、計算に関して成り立つ性質を見だし、表現することができるようにすることが重要である。

指導に当たっては、例えば、商が同じになる幾つかの除法の式を基に、除法に関して成り立つ性質を見いだす活動が考えられる。その際、被除数と除数や、商について、適用する数の範囲を広げていながら、見いだしたことがほかの数値の場合でも成り立つかどうかを確かめることができるようにすることが大切である。

その上で、見いだした除法に関して成り立つ性質を表現する活動が考えられる。その際、児童が除法に関して成り立つ性質を「わられる数とわる数に同じ数をかけても、わられる数とわる数を同じ数で割っても、商は4や5で変わりません。」などと具体的な数を用いて表現した場合には、「どの数でも当てはまるようにまとめると、どのようになりますか。」などと問い返し、児童自らが見いだした除法に関して成り立つ性質を一般的に表現しようとする態度を育てることが大切である。また、商といった算数の用語を適切に用いた説明を取り上げたり、「わり算の答えのことを何と言いますか。」などと問いかけたりすることを通して、算数の用語を用いて表現することができるようにすることも大切である。

なお、小数や分数の除法、同じ大きさを表す分数などの学習場面においても、除法に関して成り立つ性質が活用されていることを確認することが大切である。

③除法の式の意味を理解できるようにする(対応設問3(4))

問題を解決する過程で、演算を決定し立式した後、答えを求めるために計算に関して成り立つ性質を活用して計算を工夫すると、計算を能率的にすることができることがある。その際、必要に応じて、それぞれの式が何を表しているのかを振り返ることで、式の意味についての理解を深めることができるようにすることが重要である。

指導に当たっては、例えば、本設問を用いて、小数の除法を整数の除法に直すときには、除法に関して成り立つ性質が用いられていることを確認した後、 $180 \div 0.6$ と $1800 \div 6$ の式がそれぞれ何を求めている式といえるのかを、具体物や図、数直線などを用いて考察する活動が考えられる。その際、まず、 $180 \div 0.6$ が1 m分の代金を求める式であることを確認し、次に、 $180 \div 0.6$ の被除数と除数をそれぞれ10倍した $1800 \div 6$ について、下のように、0.6mで180円のリボンの長さや代金をそれぞれ10倍した6mで1800円のリボンを考え、 $1800 \div 6$ が6mで1800円のリボンの1 m分の代金を求めている式といえることを捉えることができるようにすることが大切である。その上で、 $180 \div 0.6$ と $1800 \div 6$ のどちらもリボンの1 m分の代金を求めている式といえることを振り返ることが大切である。このように、除法の式と具体的な場面とを関連付ける場を設定することが大切である。

(4) 中学校国語

①手紙の基本的な形式を理解し、文字の大きさや配列に注意して書く(対応設問1四)

手紙の基本的な形式に基づき、文字の大きさや配列に注意するなどして丁寧に読みやすく書くように指導することは、社会生活に役立つ書写の能力を育むために重要である。その際、相手の名前を他の文字より大きく書くことなど、手紙の形式に込められた相手への敬意について

も考えさせることが大切である。例えば、第1学年「B 書くこと」(2)ウの「行事等の案内や報告をする文章を書くこと。」、第2学年「B 書くこと」(2)ウの「社会生活に必要な手紙を書くこと。」などの言語活動を通じた学習や、総合的な学習の時間における学習との関連を図って指導することが考えられる。手紙の種類としては、近況を伝える手紙、何かを依頼する手紙、お礼の気持ちを伝える手紙などがある。手紙を書く相手を具体的に定め、郵便等を通じて実際に手紙のやり取りを行わせることも効果的である。その際、表書きの宛て名や住所などを正しく書くことや、後付けにおける署名と宛て名の位置関係といった基本的な形式を押さえることなど、小学校での学習を想起するように指導することも大切である。なお、日常生活においても、意識的に書写の学習の成果を生かすように指導する必要がある。例えば、メモやノート、届け出の書類、願書、会議録、ポスターや掲示物といった様々な書式に合わせて、適切な字形や書体で書くなど、書写の能力を広く生活に役立てようとするような態度を育てることが大切である。また、書写の学習で培った文字を書くことに対する意識を、学校における他の教科等においても積極的に発揮し、日常の文字を正しく整えて書くことができるようにすることも重要である。

指導に当たっては、「言語活動の充実に関する指導事例集～思考力、判断力、表現力等の育成に向けて～【中学校版】」国語－2「学校からの『お知らせ』を書き換えよう」、国語－7「心に届けたい言葉を添えて年賀状を書く」も参考になる。

②参加者全員が話合いの話題や方向を捉えて話し合う(対応設問2ー)

話合いをする際には、誰と何について話し合うのか、何のために話し合うのかを理解し、今は何について話し合っているのかを捉え、それに応じて話すように指導することが引き続き大切である。例えば、一定の合意を形成して物事を決めることを目的とした話合いを行うなどの学習活動が考えられる。その際、話合いの流れを捉えるために、話の要点を各自でメモしたり、移動黒板などを用いて話合いの過程を記録したりするなどの工夫について考えるように指導することも効果的である。なお、国語科で育成するこのような言語能力については、各教科等における話合いを取り入れた言語活動の更なる充実に資するものとなるよう、教科等横断的な視点から教育課程の編成を図ることも大切である。

指導に当たっては、平成24年度全国学力・学習状況調査【中学校】国語B1三に係る授業アイデア例「対談を読んで考えたことを基に座談会を行う。」、平成25年度全国学力・学習状況調査【中学校】国語A1二に係る授業アイデア例「話合いの動画を見ながら、司会の役割を話し合う」も参考になる。

(5) 中学校英語

①日常的な話題や社会的な話題に関する説明などを読んで、最も大切な部分を読み取ることができるようにする(対応設問7)

説明文などの大切な部分をとらえる際には、文章全体を通して読み、複数の情報の中から書き手が最も伝えたいことは何であるか等を判断することが大切である。指導に当たっては、文章全体を漫然と読ませるのではなく、繰り返し用いられている語(句)や問いかけなどの手掛

かりを基にして、最も大切な語句や文を選ばせたり、各段落の働きを理解させたりすることが重要である。

具体的な指導としては、教科書や他の題材を用いた、以下のような手順の言語活動が考えられる。

- ① 全体のおおまかな内容をとらえる
- ② 各段落の最も大切な内容を表す英文を選ぶ
- ③ それらを比較するなどして、文章の最も大切な部分について意見交換をする

このような活動を行う際には、日常的な話題にとどまらず、社会的な話題（自然環境問題や平和問題など）についての題材も扱うことが大切である。

5 結果を踏まえた取組の重点

(1) 校内研修の充実

伊勢市では、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を通して、すべての学校において「わかる授業」の実施を目指し取り組んでいます。

各校の校内研修では、児童生徒に求められている資質・能力を育むため、見通しを立てたり、振り返ったりする学習活動の研修を深めています。

また、目標基準準拠検査（CRT）と hyper-QU（よりよい学校生活と友達づくりのためのアンケート）を実施・活用し、よりよい集団づくりと授業改善の取組を充実させています。

これらの取組を充実させるため、指導主事を各校に派遣し、校内研修を支援しています。

(2) 平成 31 年度全国学力・学習状況調査等の結果の活用

平成 31 年度全国学力・学習状況調査や CRT 等の結果を踏まえ、学校訪問等により学力向上の取組について各学校と情報共有を行い、子どもたちの確かな学力の定着を図っています。

(3) 学力向上推進事業の研究指定校の研究とその成果の普及

学力向上推進事業の研究指定校で、平成 31 年度全国学力・学習状況調査や CRT 等でみられた課題を解決する授業改善の取組を研究し、その研究の一端を公開します。全小中学校では、積極的に研究会に参加し、その成果を校内研修等で活用します。

(4) ICT 環境の充実と整備

伊勢市では、ICT 環境は整っており、活用も進んでいます。今後も研究を進め、タブレット端末等を使った学習の充実に向け取り組んでいきます。

(5) 家庭・地域との連携

各校で、家庭学習の手引や学校便り等を通じて、平成 31 年度全国学力・学習状況調査等の結果を説明するとともに、インターネットによるプリント配信サービスや三重県教育委員会作成のワークシート、生活習慣読書習慣チェックシート等の活用により、家庭や地域と連携して家庭学習状況や生活習慣・学習習慣・読書習慣の改善を図っています。